東江手記

リ伊5
760
4

門 り伊5
號 760
卷 4

武江年表巻之四

正德元年　辛卯　五月七日改元

正月廿日未刻芝土筆町（ふつくけ）（名所舊町といふ）より出火西北風烈しく堺芝
青山海手まで武家町屋とも不殘焼亡刻限
○正月十九日牧和泉町より出火乾風烈しく靈巖寺ふいごる
（寺の焼失こゝ又十町計り焼る）○正月廿五日円光大師五百年忌あり　東漸大師の
遺号を贈ふ○二月江州土山田村招軍塚濱第ふて軍法
○二月下旬（しものむら）沈の辺より出火西北風烈しく処焼万家に及べり（折焼宋ふ）
○二月十五日より五月まで播州総宗寺にて梅花妙法尼
の七百世二年忌として回向あり（宋母ち緣記ふよれハ七百世五年なり）

愛宋
淺庫

○正月羽田要津院不動尊才天勧請　有る家ふ事　そる像ことしふ
○正月五日より六月廿日まで永代ちゆく房州清澄の虚空
蔵井宝帳○夏中より回向院ゆて甲斐八日市場不動尊宝帳
この時ふ事ふ様ふ法松屋三左衛門とい方ちとめて売ふとて製〳〵前ふ事ふ
宗務ふ出ふとの小ふる事ふの人の名ちぐうるべきよ〳〵ゆて制〳〵けるより弘ふる社ふらを
ぶくといぐもつ事ふるを長尾氏の浪ふ事ふ
作て名付〳〵と世ふ沙汰ふ月ふえふ
○七月下ふ高札弘ふる新吉原大門口の高札を弘ふる
○八月正ッ室銀通用ちぐまる○八月九日大風
○九月十八日蔦金村養雲ちる万然庵　孫庵の庵逝普く人の
知る所へちふ異ふ
○今年浜辺幸菴率　百三十才　大坂住　○三疫稲荷社ゆて今年より
神道七教沙汰とい事を行ひ始む　ける江府神社畧記
ふ要〳〵ちりせり
○十月朝鮮人来聘　正使翁養漢　副使任守幹　従事ふ邦彦ふり　薩宿老と
ふ接ちちふり〳〵ふ浪門へ引ちる白へ今年より八年ふ教ち

と成る新井白石先生室蔵書集ちゆ韓人のふと問答ふり〳〵
筆談を翁養漢輯録して江戸筆譚といふ写本一冊ふり年外延享十一月五日在江戸
附白石源君英　新井君美　ふ沙汰
隆正と申ちり先ちり　○十一月廿八日親鸞上人二百五十ゆ忌法会
○十二月五日祐天上人堂ちる近藤ふ命せる
○十二月十一日申刻連雀町より小乾の風烈〳〵く通町本銀町本
町石町江戸同まて焼ちは堂端まて一石橋日本橋焼落霊巌
島まて焼接同日夜宮刻火ふ法る　拝ふ氏時連雀丁
八次田町横ふ事ふり

正徳二年　壬辰

正月八日儒師中邑留溪率　名顧言称新八淺草
八幡ふ町妙源ちふ葬ふ
○正月十一日　一説ふ日二月　正月十四日ちる云　風邪焉　新採師寂　別名ふる林ちふ葬ふ
曹洞の智識ふり
○日本橋江戸橋の万度小路と成る○二月白石先生紅毛人乃
薩宿ふいちりて問対の事ふり

○二月八日浅草より本所回向院まで焼亡本所に御救小屋建つ
○二月深川往還橋改所にありける并茅場河岸にも同所にあり
なり ○七月廿八日水戸殿家臣源兵衛の室長山霄子卒 年十二才弱にして文章に
秀で和歌を詠じて烈女なりとして筆に伝ふ年山紀聞に時人ほまれしむる ○九月当十宝銭通用止
○通事丁自晃後居白木の井玄蔵銀を入善数月を経て今
年其白水を獲より来聘の韓人朴同知深澤銘を撰今年十一月
赤井将監写して銅編に鐫まて

正徳三年 癸巳 九月閏

正月廿七日狩野岩佐常信卒 七十八才 称右近
○三月二挺立三挺立の船を禁せらる
○正月木挽町山村長太夫芝居にて助六の狂言始て興行まで

○正月晦日江戸中白き花降又舎利のぬき物ふる
○五月二日儒師大高芝山卒 名重成 称清介 渋谷長谷寺に葬
○五月十九日の夜巻雲旗現はれ戌の時より丑の時まで浅月升り
しが光あまねく光り見えしまちより西の方にて去てもなく
見えし 深川本所で毛見あり ○十二月廿二日下谷より出火下谷浅草辺焼亡
類焼 ○今年深川三十三間堂焼亡同六年再建あり

同四年 甲午

三月木挽町六丁目山村長太夫芝居断絶 この時部屋生島新五郎八丈島に遠流せられ
絵島ゆかりしものおほく 江戸を払ひ六十帖に云この時芝居一番切の返しといふ
狂言の大入にて人よせに立くの者の中にありし者にて人気を取る者が芝居やめ
なり又木挽町にて山村座といふ芝居ありける男わかき役者芝居の声色を使ひける
者にて又山村座といふ酒屋の下男も茂村半太夫に声色をつかひけるが
年頃の者にありて人々あつまりて声色をまねふに作人感じける
より是江戸にて芝居の声色をつかふのたぐひはなはだしく
広まりぬるなりとこの説あるせり

○五月新金銀古吹替○五月二日品川東海寺中之源院臨溪和尚寂（石谿院第五代長せり）○八月六日より十五日まで堺上る山内常照院卒去二光二年也東宇治○法國風説○八月六日医師本下虎林卒（元文の交流布蘭学の祖）

○九月廿二日根津（ねづ）権現祭礼渡御町中々練物出る（廿一日あり一ヶ月雨天後一日今日ハ必とり今年ハ三ヶ月一年ハ止り書数五十番町数百五十四丁あり此時の番付曲亭漫筆にいへる書ハ也ハ三ヶ月暑しその所節のことを記す）

熱田より茅町通西川家西隣非田屋門通り昌平橋入非田橋より護持院裏通り元飯田町田安御門を入行橋を御殿の口大名小路能治橋出門おもてより町通りより通り町也日本橋日市土手藤四郎より日本橋通り通り町筋遠橋より上野通り石川家前茅町より本社へ帰輿あり一とおん

○十一月琉球人来聘（正徳与那城王子　今武王子）

○十一月江戸銀を改て新上銀小吹替あり

○十一月十一日夜光相辰巳より成亥へ光る雷の如く震動す

正徳五年乙未

二月廿一日備前源見詞亭卒（名直一名永常　弁達正定院小華）

○三月廿七日遠州八十才にて尚齢（ながよわい）命あり列侯の崇（しろ）敬随翁（百六十七才）小森閑翁（百三十六才）古結宗見（百八才）石ち宗芽（九十七才）下条七兵衛（九十一才）葉人谷口一雲（九十一才）長谷川平蔵（八十三才）

○四月日光山百年御祈忌法法会あり

○正徳より享保にかけて中橋廣小路にて盆中夜小入所

○正徳より享保にかけて中橋廣小路の辺より少しづつ光蓮橋法門内より集り踊りをおどる○十月十七日御人調和卒（八十余才西方彩色中興）

○十二月晦日夜半計り小路の辺より少しづつ光蓮橋法門内教学屋橋出門内まで中橋より芝口橋までの町所本橋町小伝馬町より出火久

世年間記事

角力取松風瀬平清縫忠之丞津大関とあり正徳二年雑司谷
鬼子母神へ額を収む ○俳人園女富賀岡八幡宮へ桜樹二十六
株を栽る歌仙桜と号す
○染井植木屋伊兵衛霧島躑躅を多く育す（前に記せる面向並三之丞といへるなん）
本も之丞か庭に植しなり享保の頃より百種の楓を集め其図を梓刻しまた
地錦抄長生花林抄本草花蒔絵等の編集あり梓にえりて世に行はる
○浮世絵師菱川師宣正徳中七十余才にして終れり（菱翁して友竹といへりまた）
懐月堂 号安度 称源七 との作行はる
○小舟町天王祭の時山門の造り物大根注連等かさる事 正徳中
よりはじまり今にたえずといふ（小舟町天王の御旅所むかしハ小伝馬町にありしを正徳中疫病行れし時小伝馬町の御旅所よりみこしを小舟町へうつりて疫病をまぬかれしより後永く小舟町にうつし定りと古人の口碑にあり又蓑川東寿編の譚海にもあらはせり）
○武江披沙云小石川伝通院稲荷社ハ宝永中和田倉御門

延宝年中大宗氏住居の時京都吉田家の雑掌松刀荻川の
屋中稲荷を大宗氏の鎮守として勧請まて正徳中浅用延宝
一統引払せし也白山は替地を下されし時稲荷社も白山へ
移しける奇瑞の事ありて所郷のもの増けるに依り後こさ社へ
引移しけるとあり
○鶯籠ハ古来ありしかど流行するは正徳の頃築地
小笠原家の臣貝持沖右衛門といふ者より起り東本郷東岸山
本名無之にて鶯籠を作りしより世に流行すといへり

享保元年 丙申　二月閏　七月朔日改元

正月元日未来除夜の大火（前に記せり）今及ぶ火行る（烏帽子連二株の家と火消人数或ハ近々より）
移ちとひ入乱まて混雑ましかり
けるとし打楽家の記有りといへり　十一日又池の端より火発して仲田辺本町

石町日本橋吳服屋近所焼多く獄舎も焼けるゆへ折獄
業の記あり見えたり○同十八日濱屋敷より西辺より焼て
本所深川多く焼たり
○半蔵御門外橋詰門清水門内石垣のこり通路を為らしめ
○八月十五日俳人山口素堂歿　七十五才　浅草浄土寺葬
○十二月廿九日夜光物飛ぶ○十二月廿七日備前侯下屋敷円寂　名大学号菊亭
麻布浄土寺葬す○折獄業の記成　野井白石著　編写本

享保二年　丁酉

雅楽頭酒井忠真　丁酉のゝ歌句

房総海辺をあるく所や業乃書　正親町公通卿

○正月廿二日来別小石川弓場横井家後より炎湯し奴沢田

護持院の荘厳沢田橋詰門内銀治橋詰まて佐倉の藩邸数
宇通町八丁堀築地まて武家町屋とも殿〳〵焼亡あり
○翌廿後護持院を小日向の来ふ移させ〳〵色その源兵雑子橋和
武家屋敷浦源畏地とあまり○正月廿三日俳人北嶺深井翁　巳十八才
小日向金剛寺ふ葬す○二月十一日俳人小村捉亭翁　小川法福寺　東叡院ふ葬す
○六月鉄炮洲船松町より弱近辺花万度をさくる事
今年とりたてまる○七月鉄炮洲古茶屋止
○八月新金蔵〳〵前乾金通用止　三年限り　出役止
○八月十六日大風雨家屋を損ず
○十二月十二日沢田橋大工町より炎大日本橋ゆまて焼失
○同廿八日浜さとり牛込山伏町より炎麹町に谷芝田町まて

焼亡○十二月　日国中丘陽率　武州川崎の西小向村妙光寺の僧名を善右衛門と云一年酒匂川の流れを治て功あり
後て法華の列に加はりしと

享保二年　戊戌　十月室

○二月十五日深川本誓寺の異鉄地蔵を今日より出開帳
異鉄羅漢集一時に開帳の彩ひをなすよし沙門ありて
○四月廿二日備前国井黄陵率　名孝廻　称表左帝　三福寺東禅寺に葬る
○五月朔日五郎兵衛町より出火通町八丁堀辺築地まで焼亡
○五月十五日備前酒泉行彩率　名弘　称表変伯　中見樹院に葬る
○六月七日本堀清兵衛法華あり
○六月十八日御人井田亭に我率　六十七才　本郷に葬る

○七月十五日祐天上人月忌に寂　八十二才　享保中二世祐海上人
遺跡に寺を建て祐天寺と号ふ
○八月廿六日備前三宅観潤率　称九十郎　法光寺に葬る
○四代目市村竹之丞死　室中道世一本所に自浄院と云寺を
建創し城隅と号し給へ　けるとなり今年十月十五才にして
大法華を唱へ給へり　○十月四日将軍様御代参
○十月表御座六百人に定る　○閏十月新金銀引替始る
○十月琉球人来聘　正徳　城東寺　○十二月五日小石川白山社鄙焼
○浅草寺の門田家の隣庵に伝法院
伝四郎と浅草隣の名を改る

同　四　年　己亥

正月元日閏の時日蝕　二月年　○二月十三日本町通り和田焼失四丁

十月廿五日より雨降て漸く霽る○二月廿二日雷雨たること五百年由忘

○三月十八日より五月廿八日まで洪水の事なし親世者寛恢 貞享四年より世三年間あり

○四月十三日安房東野率 号東雄 林仁斎つ三十七才 あり 橋切腹せしが疑

○江戸町火消いろは組をしまる○五月洪水の事なし堂供養十方人

操始る 日六年月ホ いろは組 ○洪水法華の祭礼天社今年祭不羅り今の

地へうつる○九月朝鮮人来聘 正使供致中副使英瑞 従事李明彦 名あり 藤右衛門 東武 朝鮮人曲ることを

憂るを見て通詞等を遣を 紙甘 比比の文集ホ ○九月四日 韓人遊 勇肉人 幸町家焼 ○十月廿日より歩行八千

坂辺野焼○十月牧嘉つ町本郷又七と云りの浅川筋の町人をうと

ら八幡原山の上より口ホ操せ元を 原雲八寄 平橋名影ホ ○十二月九日鄙人天狗飛隠率 号五垂 居所 町 秋光 ホ

ら 原色 あって止む

寛保元年　庚子

二月廿九日博多新大橋大雲寺焼亡

○三月廿七日午刻浅草町より南風烈しく毎り町日本橋

通伝馬町より浜田辺和泉橋下岩上新坂本今移其の端

ふ新り猶る○上野二王門法華延立

○七月廿三日信濃中野滝瀑率 五十四才 名延善 保川要蔵ホ 葬

○八月関東波多○八月町火消の纏竹を組の方幟を記しる

長七尺の吹流を下又捉を記しる 要蔵を副 比殿代の纏なる人色 根の編を立くまさ

纏ホ流 ホ る 地 拠 灯 ハ 仇 形 平 赤 く 毋 ノ 纏 を 用

○八月十八日信濃新田梅渓率 称 橋平 今年の男 ○九月四日大風

○九月廿一日日山橋現ホ橋 寿子町より ホ 練 橋 ホ 記 ホ 中絶

○今年冬冷氷中納云為御ハ法年間あり時為氏伝遍世ホ

ふ こ あ ま ま ま こ そ

○洞院殿焼亡　[illegible]
○吉原丸焼ニ付　[illegible]

享保六年　辛丑　七月室

正月八日巳の時吉原町より出火西北大風通り二十間より京橋
辛材木町八丁堀木挽町鉄炮洲築地霊巌島銀町まで焼る
○二月二日辰下刻ニ河町ニ丁目裏町より出火して神田名下谷
上野仁王門焼失本町ニ而まて焼亡
○二月ニ日己刻ニ年込出納戸町より出火小日向小石川辺一帯ニ焼
白山の辺より二湊ふきより日暮里まで焼る此時伝通院へ逃入焼
死する者二百八拾四人ニ而一基の墓を立る今ハあり築土八幡宮白山社も此時
焼る伝通院焼失後殿堂造営定る

○同寺新たに出火消防安小川町へ引うつる
○二月十五日金瞳山柳川政次寂　柳川の祖なり
○二月ニ日水府侯医者因林庵寂　八十七才岩井大敏子ハ業医義子
○二月十二日水府侯儒臣森尚謙寂　号儼塾
○ニ月法社の祭礼の時屋敷と名つけ[illegible]る物を[illegible]ル[illegible]ル[illegible]
○五月神田橋法門外ニ於て吉林見宜　法医作
○六月十二日　三廿七日　茶人懸宗紹寂　号丞京子ハ[illegible]
○書物奉定る　○六月二日伯耆守[illegible]
○七月廿一日藤町八丁目通ニ[illegible]
をおいて[illegible]
又一顆をおいて[illegible]

号信法泉涌寺法華経寺本を殘すて舎利の記一篇をあらはせり
文集の中にあり　○秋冥庵湛方　○十月金銀引替
○十月湯島三丁目淫祠を撤去す　今橋場観音堂にあるも千住寺
年建立なり　○十二月十日二河町より出火通町筋本
材木町坂本町南茅場町八丁堀鉄砲洲築地まで類焼
○十二月廿七日浅草氏十一代通称平八郎
○南面列志云まこと完といへども古今を掌る完なりまみらまぶ
の事多し享保六年の版黄金の丹り流布すまとらいまこと年の
ほろぼしぬなりて場こ版あるのみ
○芝永井町屋町冨山町塔上るの火除地となり神田の習地を
なする○あづま後記刊行　貝原篤信土佐守遠

享保七年　壬寅

二月十九日より八月十九日まで一切橋古つ所地に諸人遊賢人を
ゆるさる事始る○二月青柳ちり花ちり塔上も春つ花寅小
路と濃る○二月十八日より七日の乃濃茶を観世音寺張
○五月十九日備前中根桂叢寒　名重玄　称方内　本西四院の義侍
○六月市中多賀御百人一首諭衍義をあたり兒童のもなを書て
ちつの板小命せらる　六諭衍義八宝塔の栗比丘の教ある　平小一十　宗制あり
○七月江戸中某稲荷屋共九人小定る　伊勢町小　今本遠
○八月八日備前源見玄蕃　七十七才本姓を浮称歌右衛門書を宗法濃茶
観音を施主畏の郷を書一人あり上狩護函
院子　○十月千川上の青山三田の上の堤を止る　安永九年の頃十川上の再度
新しき為越り宜しきぶり
○十二月六日神田竹鼠町より出火神田一帯小焼亡

○小石川清蓮寺不養生所建十二月より貧困の病者を治めく
薬餌を与へ（やくじ）（はの板を彫刻はこのひしゃくをもとより板に彫る人なり）
（りょうぜんいん）（ほんあつ）（いしゃ）（小川笑覧と云人なり）

享保八年　癸卯

二月十六日赤坂伝馬町より初火消組出る
武家方町屋類焼数〻　○二月十五日より三日の間中村勘三郎
芝居百年の興行云彩鳥（まんが）（ちょう）（こと）猿若大夫（さるわかだゆう）を興行
○二月廿二日作〻木玄龍寄（七十四才文山の兄弟出家）
（坊主寄浄蓮院本寺）
○二月廿九日鄙人志村垂倫寄（六十三才）
○三月十九日坊寄人鷹千年忌（二月彩日貧困坊社へ
三位坊本大明神と落名あり）
○元禄銀宝永銀中銀二ツ宝銀併宝銀通用止
○九月十四日彩井明卿寄（白石二男　彩侍義濃守
坊寄市之進ちゃ本寺）

○六月湯殿深井秋水寄（八十二才）
○七月廿六日池上本門寺堂再建入仏供養（宝永年中焼亡の後
廿三世日浄上人再興
○八月近在安房○青羽町九丁目青柳町辺飛鳥掛大の時隠
賣女あり〻（野とありて所や
青羽のろろ之説）
より上
義歟）○十二月九日牛込より出火市谷内藤町辺焼亡
○十二月十日湯島天満宮造営迁宮（此時）

同九寄　甲辰　江戸

正月十二日英一蝶寄（七十一才三年板義数寺敬寺焼亡葬儀
まるくろ江戸浮世のうきの色とりも有てやすく落書の月）
○正月廿九日加賀町より出火東八丁堀月町東の本横町より焼る
江戸門焼失して大の復帰再建世〻（本横町出火消
屋敷江戸入る）
○万久保八幡宮寄の災後造成去義造ふあ〻〻む

○甲府城焼落る○二月日詳ならず　本郷より出火築地近焼亡
○六月七日將軍家光公薨年　六十才
○六月廿五日東都毛隆長サ数十尺ホ溶るも毎一色白くなるの
尾の細きなり〜○八月御蔵前札所百九人ホ定る
○十一月廿一日郷人二世の立志年　漢学者名著
○寛和通暦刊行　京伊根之圭編　平藤氏

享保十年　乙巳

二月十日青山久保町より出火東坂尼谷市谷牛込大塚高田
小石川巣鴨弱近谷中下谷合計まて焼亡
○二月五日五百羅漢堂再建供養成就まて　是家先祖尚元孫の為の市中を勧化あり功成られ
○閏月十九日郷人菊石亭秋色年　浮世絵師　見〜美のさめても色のうきつもる

○九月十九日官僧新井白石先生年　六十九才名称字君美
漢学者儒者中津之徒ホ葬
○六月廿二日吉筆六代目青蓮年　五十二才
○七月廿日深川猪殺一寸見河東死　閏十二才天満宮社家中所西ホ彩ホ弟家殺
ホ葬氏を氏建る碑ホ十三回と建る碑ホ
○九月二日芝増上寺死　大名家の小うくふりくるホ増上寺のみ
いに源川墨江町ホ居〜葬抜と号氏
○十月大判出吹智元孫大判出吹智あり
○今年長崎の人志賀随翁　百七十八才　小石動宮寺　百廿二才　伊藤市蔵　百十八才
石井効寿　百二才　沼田伊兵衛　百一才　水野徳中ホ坂　九十二才　紫田十吉郎　九十二才
下条長兵衛　九十二才

同十一年　丙午

二月七日郷人宝玉琴風年　号紫屋　妻芳ホ葬氏
○閏月廿日郷人雪女年　六十二才利髪して知識と成り
出家ホ市会公平憐れ葬氏

○正月廿九日傷寒士紀默翁卒 自観居士と号す 市谷長安寺に葬す

○今年立春雪ふる 晩人侍年山 紀州にあり

○四月向院にて薩摩藩 赤穂浪士 天照山大吉寺

朝日如来開帳 ○五月浅草小揚の理髪湯 元亨人の老母ふしぎ

奇特の事ありて褒賞をなす

○六月廿日御人形開帳 六十二才号合歓堂 浅草寺にて彫ものなり

○今年より十七年まで深川十万坪に砂場あり 元文元年五月ふも 同所にて砂場あり

○十二月十八日大道寺友山翁尚嵩命 志賀隨翁に厚交人の 翁命ずるに云姓名を葬す

享保十二年 丁未 正月室

二月朝日夜五半時光物東より西へ流星の如くなる

○本挽町東劇場焼る

○角田川木母寺梅花九七百五十年忌開帳 三月十五日より開帳

○書籍穂集成 紀氏新友山翁八十九才 編製年追加成る

○五月十二日御人形百度開帳 号雷電 六十二才多田甲斐守別邸東海寺に葬す 辞世の句 死て歩てまてしし死月を見るそうし

句を石に彫て墓に建る 墨花堂仙文山の墓あり 詩人雅号八百屋の男あり 性誠 あり 明和五年七月六日歿 享年七十 松濤院に葬す

○六月上旬より本所番町に非宮殿門〻常陸宮阿波大杉大炊介

花稲荷あり 大炊家歌集一百 家歌を出す 英藻あり

稲の家歌を出して年貢を祈る 世事を作る

○釜原定林卒 月日未詳 ○十一月七日特材北町四丁目に養子

又四郎妻くま年六代患八刑せらる 多の世人の

○十二月十日表二番町より猫町永因町 鹿の家虎の出門久保

町あこ下橋上に裏門芝浦にまて焼亡より猫町うら通り

焼死と成る ○十二月十日御人志邑侯風卒 年十四才 法名 大雄寺に葬す

享保十三年　戊申

正月五月清水如水卒　七十二才清水氏名合称ちなみ如水と号す橋山町に住し狂歌を[illegible]こと又めろくの狂歌をよくせり俳諧に名を[illegible]ふ[illegible]ありしが[illegible]雅[illegible]集[illegible]ありて[illegible]あり[illegible]卒[illegible]

○同六月狩野如川圓信卒　六十九才

○正月十六日夜光り物あり○正月十九日宗傳僧正遷化先生卒

六十三才久義仁称慈雲号　○日蓮宗霊源光寺富山阿波守の請弁を求て

三田長松寺に葬る也

八幡を定む井上通憲の序うあり八幡

暮菊烟雨　神羽老杉　巴なり又高田の

十二景の詩ことごとく伝林多酒の撰ありの

○二月十六日猿小屋町より出火小川町一ツ橋法門永寿寺

焼焼　○二月芝宝宿山寒堀

○正月廿四日濃州板倉復軒卒　親有公法隆寺に葬る板倉

帆五の墓も同所にあり

○昔町麹町元山王永田町猿楽町小川甲斐河岸阿部川町辺の家作

芝宗葺を止る○七月二日連寺橋宝村仏氏卒　五十九才

○七月京仲の町小焼を[illegible]　角町中万字屋の名妓小菊といふもの

三回忌ふいとう会弔霊をまつる　京保十一年午二月廿九日死せり今年

びるをすゞむ姫ハ切子とうろうあり　仲の町張や鬼文揚屋町　松屋八左衛門ちゃうとる者

あり一ことうりとう　京菓遠花祇さうし　小川屋笠の奇巧より江戸ハ[illegible]

河原祭の上るり　竹姫人形　沙羅[illegible]

○八月廿日夜より九月二日二日ハ大風雨あり　[illegible]

橋和泉橋北一橋柳橋二日の久方流れる二日朝雨霧橋中程

二十六間切流る　大橋西の方巾二尺程切る永代橋の番所の中

ゆて古橋抗流る下谷浅草の門後き[illegible]軒場ハ[illegible]小石川

流芝橋も[illegible]小橋流る同白山[illegible]上ハの白[illegible]

門前平橋の二橋流損ふ[illegible]川[illegible]

○十二月五葉永川堀普請ありて両側小石川小日向辺大名の邸形を死
自出ずるなり
○九月晦日僧侶俳諧師義孝寂　名邦達　泉岳寺小墓
○十月廿日浅草日宗寺小異子毋神像を安置　日法上人俗孫金
俗人孫田氏作
○江府神社畧記刊行　荒井赤敦編

享保十廿年己酉　九月閏

四月廿七日国学者源光海寂　名良興孫宸内七十才
青山玉窓寺小葬ル
○二月十六日飯田町坂上武家方ちりぬけ　名田氏名
内藤家ちり　田安門外赤焼の
西丘用地小減る○五月交趾国の鄭大威という者廣南国の賊大象
海を　去年六月長崎へ牝牡二匹を渡す牝牡二匹を大坂へ
牽来り同月京都へ入大内へ牽く　五月廿九日江戸へ来る　牡八中秋小あり
小驚るを唐人今も中秋宴泉寺小あり　この時京師小て
徳川卿家の江戸へ来りしを世小驚恐ありしとかいつる

世の業をうけつぎのまりやこと一身をもてむかもまこと御代として　烏丸光栄卿
この時中村三近う編の家の貢自筆をうる家貢珍記又編者西郊家志などいと云
京師せり江戸の俳人仙宿うる白小　今やひく家士の語神ことつもり
山王社小祀の時祇町ちり大家の作り
物をいとる事この時のまねびありとかいつる
○十一月廿二日書家猿渡孫作寂　号鶴溪翁　孫清助
芝増上寺雲ちり小葬ル

同十五年　庚戌

四月江戸町火消江十七組を十組小定ちる　目下の基の弱形あり纏の吹流し
止てぜまんを付るこの附小組江十
七組ちり後小本組ちて江戸八組と成小懐止く迫く
小纏ちる大纏小まとひとも升　張箔なり
○三月十八日深見十左衛門事貞休　九十才本江戸町
読者ちる小葬ル
○三月本醫室鳩井五冊刊行
○江戸赤坂氷川明神今井谷八幡宮社法建立あり廿六日迄天有
○宮田八幡文殿損ちて河て表ちを七左衛門を請ふて五月十五日ちり

日数五日の間地内に於て動化触興行　様表金二分ゟ一分二朱
一人分限二ぬつもり
○六月十六日薬師如来開帳　百八十三年天徳寺
中興の流れ
○八月廿九日大風雨　源川世三郎堂吹潰れ築地大破
○十月鵜づかひ　やまひ
○冬とり豊年ゟ麻疹流行　夕ゟ七百年
汨をぬる
○見立那見沼ゟ新田を開く　去る戊申年ゟ紀ゟ変沼を新田ゟ開き
〜沼る田畝ゟ沼友清と云者を撰ぶ
あつゝり生田を命せゝ今年も又　命ありて美濃守文章紀秀と倶ふはるを頼り
多くの田を立てゝ生沼見沼の新川ゟ船を出せんを申〜ゟ先〜ゟ
見立侍五の二郎の内ゟて六西の地をゆひ沼戸神田川の辺ゟも郎地をゆひて九沼川運
漕を事ゟ命せゝまゝ生田を出紀年紀と云ゟ孫弘紀に年の件ゟ記ゟ山田
なり

享保十六年　辛未

正月八日將軍菜川吉信卒　三十六才
○二月十五日西北大風　午刻同自長武家方ゟ出火ゟ辺のこゝ
西南迄も焼失　関口水道町　改代町　辺神宮赤城の社ゟ武家組
屋敷　牛込市谷辺逆坂上下ゟ出火　榎まて新焼　時船町　三丁目続
番町へ飛火　半蔵ゟ門外ゟ出火　榎まて新焼　時船町　三丁目続
長藩邸　虎御門　幸橋ゟ焼出ゟ　宮社移り久保町芝ゟ通町筋非
明宮ゟ浜地海辺ゟ移り暮ゟ時移る武家町　ゟ社駅紀
迄焼あり　○五月廿一日官儒安見晩山卒　名元孝　称文平
麻布　号鶴ゟ本姓
○七月十二日業人野田弁蔵卒　名久忠　極楽ゟ
号仁ゟ本姓
○八月十一日夜ゟ十二日巳八時まて大風　十七日夜并九月二日大
風雨　○九月十七日將軍永生の憲信卒　二十才

○十月十三日蓮上人百五十年忌法会あり
○十月十三日嘉降 ○十月十九日備前右田弟與率 称義八二才板
義敬ゐ
ふ葬を

享保十七年 壬子 五月迄

正月十二日備前矢野独秀率 名義孝 称理平 下河淵景平葬
○二月十二日光宗下青松ちとり新橋を焼同日小石川白山
ちとり赤松平田あ長郎ふいつる
○二月増上寺柵門内子聖檜現勅請
○三月廿八日浅草平蔵ち門前ちとり赤大浅草下谷辺寺社町方ゑ
焼亡 代官長谷川の内ふ猫屋町藤屋町福屋町等代内 町屋を 石上て金一切田ふ下ち智地を下しゐふ
○神田明神橋門再建立 町くちとり神の絵入刷の三分一を見猿り金三百兎を
収ふ生服武家町人ちとり寄附をもて建立ス

○浅草寺命院ふて上人秋田医師の三職某師寄附
○岩松地院ゑ国ふ赤ふく寄附 ○天下飢饉疫病行る
○六月十三日鶴屋杉風率 八十六才西年教ち中 俳諧寄ふ葬ス
金華率 巳十五才称源寺ふ葬ス文荘先生と法名
○冬浅草名人栗本光寿率 八十才 邦因ふ居せり 鶴の空とふ習味を丹誠
ゆくさきとふ 世ゑ法ふ入ス
○菊〳〵 扶桑流 明見入ス法入編写ふあり 芭蕉
世ゑ法ふ入ス
○江戸砂子初輯成七巻刊行 著者浅原の編あり後世ふ伝ふ世ふ沿ふる
恒貞親王渉補正再刻〳〵今以て世ふ沿ふる

同十八年 癸丑

真言浅草寺奥山ふ桜樹を植 ○巳月桑酒林信充月蓂堂流行
ふ拾ハて十二四京の詩あり 十二京ハ 飛波義陰 秋文遠新 浜崎川多賀 梶本村田家 ゑ子深林 平塚蓮厂 鶴麦秋月
深井夜雨 星巌山秋雪 岩瀬川帰帆
中里勉強 西京晴嵐

○冨士浅間宮神殿といふ者俗称神ふして冨士へ登る事二十三度
終に今年六月十七日山の七八合目にて絶死せり　青山海蔵寺に墓あり
○二月より回向院にて撰択浄土宗釈迦如来開帳
○去年ハ川崎宿遊廓○七月上旬より疫病天下に行はれる十三日十四日
大流行来絶えり業にて疫神の形を造りて巡りを送りて疫を
教をなすこと年つれなく海辺に到る○凡流行の救をなる
○七月八日より築土明神社頭世嘉寛帳　八月廿八日まで
○八月六日金彫工横谷宗珉卒　名高き人
○八月十九日夜より夜に入りまで大風雨を潰せり
○川崎宿長寿石観音の霊験海中より上る
○九月将軍家光信濃国の鎧を画く家を浅草寺へ

献ず○江戸名物考に云江戸の町人加賀屋長兵衛忠義を
長崎に廻送せり　○十月浅草鳥越谷稲荷社四世若の家を持て今の有是に御僕沢村長十郎の縁ありしかり
○江戸名所六十帖の名を異にして云江戸市屋宗助といふ商人元禄中に云の大火に焼ず
本の焼ひをなすこと又渡船場の名頃文頃に成り
の名を著りて次第に社会よく大分限となり江戸市屋格子といふ宗助五十才計り中にて子孫
世を重ぐ繁盛して百年にとりてりと云し

享保十九年甲寅

二月廿日江戸浦安谷村の涙縁二ツ流寄る五尺　二尺　去る橋辺度切に
て寄せ拾と云○二月廿五日儒師田中蒙陵卒　二十六才　山谷
陽宗院に葬
○三月廿一日弘法大師九百年忌　生誕の云家寺院
法要を設く
○四月廿日紀伊国屋文左衛門死す　西国紀文と云鎌倉千山と云昊蔵寺中
陸奥国院に墓あり晩年深川一の名居乃
別に席にて
終まり

○七月廿五日世上へ毒の降るとの噂して井戸へ蓋をおく
○八月十二日宮僧宗旭菓子を生る 七十八才 通称彩助後の宗甲宗町伯 大坂護持院東農家の後小菊氏
○九月十日俳師桑名貞作卒 六十五才 法華寺小菊氏
○十一月宮医平月二英法菓法の七宝英鼎丹を弘む
○十二月本所小法菓流建
○大坂本作把茶根江戸へ下り見られ義を受帯の浮猫猫を小
沂する把茶根を処方巾世に居住元と成る

享保廿年　乙卯　三月改

三月廿日深川茶屋家十二回忌法華経の講を石碑を建る怒文
南條小兵衛撰あり
○三月十九日俳師山田藤濱卒 名弘爾 称大作 谷中南泉寺小菊

○三月本石町へ初て人参座を置る町医岩田玄治杉山養元和
参を制し同本下浅草見元人参獨参湯を弘む
○角觝人九山横笛長崎出て後○紅板の名号田向流出て宗流
合運あり○同所平下総彫物狂帳○東叡山小右衛天宮建
○五月七日書家作〻本文山卒 七十七才 浅草流小菊氏
○五月晦日俳師奪貝爽鳩卒 四十六才 彩坊 四源寺小菊
○七月二日黒雲天を覆ひ大風風を発し所〻家屋を損ず流巻
ありといふ○秋深川八幡宮の境内小俳師狐空を狐数見神〻
て神小祠あり小祠を建る 吉田家小伊勢あり〻流之小狐空稲荷と称す 享保十八
年巳月廿二日之卑雲寺京狐法師墓の例に葬る
○十月麻布之焼亡○青木崑陽 称文蔵 名人節を夢りて母報を
哉○冥土出〻飛

○十二月廿二日細井広沢卒 七十八才芝白金村済松寺に葬る門人平林惇信 松下烏石葛辰 関思恭 三井親和
篆隷道を弘教多あり
男を九皐知文といふ

此年間記事

○目黒なる瀧泉寺金毘羅権現社造営 或説当社ハ寛開古しといへりけ時代再興ありてより諸人も詣しけるハ寛延元年八月九日に十坪境内寄附ありといふ ○葛西半田稲荷社 平井聖天宮参詣多し ○江戸中瓦葺 御免あり

○中野に桃樹を栽しめらる ○染井植木屋伊兵衛百種の楓を養ふ ○武家にて縫上下享保の頃より始るとし瀬田問答に見えたり 但し裏付上下ハその以前よりありて見えたりとぞ

○神田明神社神事能ハ大永年中より連綿たりしか享保六七年比衣装并道具等を収し金庫類焼せしより其のまゝ絶たり

因に云中古祭礼に屋台と号しける物を出したり破風造りの屋根に車を付たるものにて其作善尽金銀にあり其中に人形草花等のたぐひあり是を引渡へておしける其費にしたるを合て二十五両を限りとし今の出し一車の費にも足らず物價の低き事ありけるを見るべし此屋台の外にも附祭と号し所の祭り物をも出せしあり屋台ハ享保六年に御停止ありて其後ハおどりやたいを出し宝暦の頃より附祭に踊を出しける役者にして踊台の正面に二しうけをなし女子二人あそびて踊をうけ唄をうたひ三味せんを深川の者のちりめんハ紅絹の裏つけたるを着る踊子ハ手をおどりて踊る所を被ハ座敷同裏の内なり指南ハ日覆の上の方へ紐をて結ひより男子唄三味線を弾けり此ハ今の獅子といふものをかむる事ハ安永頃までの風俗なりとて天保中絶たりしを近頃坂田氏五所の売出しあり

○此時代書家 昆林竹 細井広沢 赤井得水 滕東湖 佐々木文山等なりけるとぞ ○芝東禅寺徒弟唐師号英巌と云 幼にして宗元の体を刻意し詩作に妙を得たり 後徂徠及び南郭に学んで詩風を変じ北生集 江陵集を刊す

○享保中荷田春満東都に下り国学を教授し元文中京へ帰る

○此頃浅草寺境内に於て霊全といふものの辻談義を説き云を云へく

人の笑をとる為のみにもいふ法華経の事なるべし
志道軒いはの昊舎を出て別宅するものありといふ
○時計茶昊堂とり渡る○江戸中素性流御とて家元なるべ
ありとて始て止とり○浮世絵師 奥村文角没 芳月堂
仙花堂 名居清信 同清倍 奥村政勝五郎清喜 冨川吟雪房信勝等
行る○浮るり浄瑠璃宮古路豊後掾享保の末京都よりかり一時ふ
行する この時豊後掾の風俗を出の似るく髪の文金風とてさげの髪を要点元結なく巻
髪にて髪の毛を下にうしろへ引き上月代の際まで巻込て結ぶ夜叉と刺叉
の羽織を長く袖を出さんふかくむまたひ下駄の歯ま
ゆる様ふしてて婦の様ふしさしふ宗長ひ流行の風俗
○半左手節 一家を立て別製して板ず梁をきしの 河東節 半左衛門
享保年中豊後掾去
○松浦宗五郎板四年江戸小名倉庫ふ小唄流行
○大夫こ稚小うこ流行 中村若名ふ吉曲形繁昌りて
○拳お撲流行 拳女玉菊おくの
○栖系角を清とり著 恵比寿とり帆柱を無く切ふ早く行る
久しうして止む 大江戸表
○和川入江谷山稲荷社出来享保乃
ばまて家居もあるうしうら今の町並やうあまり社里民の家ふ立
しを遊行上人行化の時上人ふ化ふて勧請せりとあり
○大久保七面文別西法若るいむし桜の名所ふて表毎年綾
此所ふ拝親せり表時山と号もるもこの辺なるべし享保の頃ふ来
接も強りしうど遊観の人ふ稀なりしは崖下居いり
○連雀町ふ節遠信門の内須田町の続ふ至りて班所廣協とありて
今の西引けるふ享保のちしあるべし
○享保の末横山町の伝外屋敷地を宮ふ二分町と

長沼の西小流溪を穿鑿せし今加賀新田と云所なり又祇田多後系
とりふるの長き〜流溪を後年清祇田といふ
○世初武相の界境原坂夜毎小鳴物の音あり笛鼓尺八の合声
ほのかに井戸老人の声一人あり近在江戸たりも皆小鳴人毎〜一方十
ろ小寄〜とて盤子を書小寄りと止　大江戸裏秋年記
元文元年　丙辰　五月七日改元
正月仁風一賢上梓公布あり○彼岸会宿板
○正月九日茶人庁長九内率　号丁巨　三篇如茶もの小茶人
○京栗生肥光流寺渡子御新田向院小子冥祇
○同真如堂本堂湯し女社地小子冥祇○五月ろの字令銀通用六月
引賀始る　文令銀　○六月廿日園林行率　勃海と号小石を置く　流寺もの丁家安寺茶人

○七月下旬より東の方小布施早魃あり　表五月に記あり
○八月品川小崎　大統寺小長道子の筆南流補陀山法海寺立ん
親世音像を写して碑を立る　素人疫伯喬写　加義氏造立
○八月晦日古筆了仲率　八十一才筆　隠江戸小長小冥祇
○十月小梅村小子歳を祷さ仕こる　背文小の字あり今年　猿江戸も流流あり
○十二月江戸大雷　合運小　○十二月下旬大煩ひ多く死ん
○武蔵野地名考梓行　稲毛郡上芝村百姓　田沢保之帝義章著　一りとの日記梓行　釈法編
同　二年　丁巳　十一月園
三月十六日より流芳る親世音冥祇
○三月廿九日同白瓜動る牡長谷寺の法花堂撞初めあり
○正月廿五日西時小山の辺より流あくる協小より小稲田町迄を

表き人家ホ損セ○五月二日下谷八幡町より矢ケ崎士町ヘ
上野廣小路池の端ホ掘山茶眼堂ヒ外坂本合羽屋の類まて
焼る○七月十九日青ヵ池永道雲率 名英長家則を号く江戸系譜に載せる小藤ま
○八月川に落死せんホ沈魚ホ羅りしら氏帝より再建の勅奉加
をもしむ男女老稚日毎ホ募縁の事をうけ紙をなゝし市中
を辻行して施物を募る九月ホ到て信止せしる事ヒ生この
奉加の事を機まるの文あり則此生の文集ホ載せり 生文而自けまと
○花名る山く桜樹を植しめしる同所へ輝立師風卿文を撰走 合羽ち伝蔵
宵闇傷船の建る而之事等し川の名所雖
の地名ホとりて式ばとり名つけ〻まし中ヒ○八月廿日信濃国善光寺率 称左右衛
○飛戸又深川ホ家ホ川ホて溝渠あり小家ホ川ホて繕る下の也社
表の橋或ハ背面ホ川の字あり

○十月十日夜五時星月を貫く 東より月出ホ入り東方ホあり
○十一月七日世上一同ホ煙の如き物吹出し火事の如し世俗暖氣
ホて筆せし桜花咲 ○同十一月十二日二世英一蝶率 通称長八浜川陽嶽ホ葬
○十二月十日水府廣信安横澄泊率 号老牛居士九十一才 ゆり舞出生の人
○薩摩芋此ころより追く弘まる家唐ホ到りて上総下総ヒ
ホくあるく俗る

元文二年　戊午

二月彼日夜五時ヒ光物飛ム
○三月廿九日備前阪内東溪率 名隆興 儒者 本藩ヒ葬ル
○四月廿七日書家岡秀行率 林竹の男名義号称清率 儒者ヒ于宗安ホ葬ル
○五月五日備前入江左華率 名波字子星 下谷常林ホ葬 発文陸風ヒ 出奈沼水

○五月十日儒師徳力恭好卒　号有隣日暮里　東泉寺に葬す　○冥途幽界
○七月廿七日俳人深川湖十卒　六十余才一号老鼠　山谷宗林寺に葬
○洞房演雪梓行　序司馬　冨士

元文四年　己未

今年浅草寺久保田の向の折節花を山の様に飾りなせし
打枝の色香見せんとあすの山花のところの基も知らぬ
○牛込某氏の子樗園発狂　○回向院にて二月廿三日宇宙寺開帳
○幸所押上にて鉄鐵を鑄又年壮新田にて鑄鐵あり
○三月廿日神田湖邨卒　号大柳子　ものの火にて焼亡
○十月世話人浅草寺浅草御蔵を修る　○米穀相庭に付
下直の出掛米あり　○十月廿三日儒師宋加新卒　名洪漢　大阪出厩島に葬す

○十二月晦日日暮里某氏稲荷に自殺落生　秋葉に葬す　武乃
真間を過し渉り狩ひろく耳国を窮せり同日宇才にて終る
しかも見えさり墳墓も同じ所にあり　自嘲落先生通称山崎三郎右衛門とい
の狂号あり性質氣豪にして士官を辞し名を不思庵　不量軒　捨生翁　魔連房に
して其門に於てより　風俗文集二冊　不思庵男に狂二冊刊行せり

同　五　年　庚申　七月宇

回向院にて伝州若光寺如来開帳
○伊勢の府の阿波沼戸にて開帳　○二月十一日南部の二男
愚卿痘患に罹りて卒　十七才称愚二郎とい本海士中に林院葬す　幼名彦
○七月朔日書家薩摩東海卒　名維章　根岸　若竹に葬す
○郷人清水紹波卒　三十六才法華　称会る小菊　○九月一日浅草元祖宮古路
豊後掾死　○人るとい小藝姫業を変てくるに若名一宇七月

信ず○十月廿六日東湖徐侯寂　小石川三百坪邸内に葬る墓は紙上の項に元あり

出羽国紀年

小金井村（こがねいむら）小和田（こわだ）吉野常州桜川の桜の苗を栽添る（時八寛永のむし）植させ給ひしに百年ばかりにて枯しかれしといふ　○武蔵志料に云玲々森に満る玉垣は此年在て寄る人と

ある説の烏石に麻布雑色（ぞうしき）町の住人吉川と云ふ人数年在て寄る人と

是は今も面の名を寄る石と唱ふ元文の頃烏石（うせきろん）菊辰巳の名を世に

知らせんと此石を彼の森に移し建しなり書家の虚

名を好む如きのみなりと云

○平林惇信（俗称庄五郎）又に遠藤清左衛つと云て室町の帳面に清左衛つ

書を能くせし大福帳の上書（うわがき）して貴事貴ありしに清左衛つを

きらひて庄屋沢口沖蘭の家大方彼の上書を求しに惇信に

細井廣沢の門下入能書の徒元あり

○石碑の深撰拓本ある市松形とのふ亭と舞妓没年佐野川市松

好こそ品しるなり○舞子の花のんさ一本有り

寛保元年　辛酉　二月二日改元

正月廿日書家に清支考没辰年　七十才号友竹　車坂大谷に葬る

○二月九日浅草七十二代芳栗年　五十四才　○二月吉原仲の町桜

を栽む　後寛延二年の例に倣ふ　○二月朔日雲光院和尚要河寂

年室再建せし　○永代橋会議成就文字橋　○七月十七日儒者伯夷周彩年　六十才　深川に葬る

葬　○七月廿日新井宣卿年　白石男　○十二月廿五日捨像流剣術祖

元本左衛門年　汐留に墓あり　俳世の年形付てあり　俳諧にすぐれたりとも成るのみなり

同　二年　壬戌

正月下旬より東方に曉七時ごろ彗星あり 長サ一尺五寸程

○六月六日郷人早世巴人卒 六十六才

○七月廿八日より為隙漬八月朔日益八半時より大風雨夜毎に止事なし 江戸大水漲り出来新深川人家を浸し大川通り多く数列に堤を築き堤中に杭を流し永代橋新大橋損隅田川土手切る葛西に多く押入千住土手切る五日又利根川堤切る沼宇ふるさ惣り溺死多し 官府より治助船を出さる 中旬ふるて引く 実に前代稀なる洪水なり 八日九日又大風雨あり 下旬ふるて引く 実に前代稀なる洪水なり 御普請あり 翌年癸丑五月刀称上流以南 彼岸芝増の碑文 後元禄こまを撰を

○文政橋南に月堂法華堂中興開基 ふるり三年ふる及び文享元甲子五月元のごとく法華堂成る

○十一月故実者本邑の敷年 芝泉岳寺 本願寺

寛保三年 癸亥 正月至

二月朔日より上野清水堂観世音 久 寛保 ○二月九日より 浅草乳山聖天宮開帳 ○同日より護国寺観世音開帳 ○二月十五日より穴八幡宮内観世音開帳

○三月十五日より芳町葉作楼内井の改弁才天開帳 此度友人芝蘇子より開帳記と云一冊子を借りて寛保二年より天明八年迄の開帳悉く集記せりあつて手傳こゝに記せる故式をもの開帳ごとに お浚ハ除あり 見る人いぶかる事なかれ

○花屋山の花を押花いつのまにて完璧上人より 冷泉家 村々

折枝のむらもとあまたの山吹の花の芝の色番外 時風ヒ

○正月朔日より清水堂西福寺にて京清水円光院観世音 日蓮法華本尊

寄帳為稼る矣才天寄帳○同日より王子稲荷同稲荷寄帳
○同日より日暮里淫光寺人尼形神寄帳
○同日より六阿弥陀仏寄帳　弘基井ゐ平
三年原注畢
○同月六日医師平月百里率　号雷山又号庵居七十九才漢学を松院に
葬る和哥を能せり一人に同形ゐ百里二人
あり一人は俳師高飛百里
雷を上と号す浪を浪をべくべく
○閏同月朔日より湯島社内ゐて大坂天王寺
聖徳太子寄帳○同日より市谷八幡宮ゐて野州東光山医王
寺薬師如来寄帳○同日より池の端ゐて比叡山坂本西教寺
寄帳○六月二日尾形乾山率　八十三才号深省称北三所法橋
光琳の兄と者とする人形に陶器ゐ
名あり茶ゐをよくせ
坂本西教寺ゐ葬せ
○同月初旬比丘尼中宿を行ふる　寛保元年の比ある
比丘尼八反町ゐく
根田辺の寺と俱ゐ焼死せり者ゐ〜より比丘尼町中くあるゐを止めゐ〜せ〜ゐ比丘尼ゐ
十帖ゐ云ゐ外田ゐ〜ゐあるを上と〜ゐ田ゐ云ゐ宿ゐ明和東町
を上と〜八反町を市と〜を服装をつ服装ゐ京橋太田中紀国ゐ町ゐく〜ある浜中ゐ寄宿
細ゐ浜芙ゐ海の浜中ゐある上の比丘尼ゐ子びく尼二人

つまゐ合堂同を
おゐゐ〜ゐと云く○七月朔日より厳島流行町浜流行寄帳
○同日より飯田町世継稲荷寄帳
○同日より市谷八幡宮ゐく〜ゐ風車ゐ月輪院ゐ動ゐ寄帳
○十一月上旬より夜〜ゐ弥生ゐ西の方ゐ現ゐ　稲荷
ゐ
世年間記事
御猪宗ゐ道江戸ゐ世六人あり駿〜紀ゐゐて弱〜〜〜て常ゐ〜ゐ
人の猟ゐて千〜の秋〜ゐゐ御書ゐ〜り今ゐ宗道と号ゐる若ゐ織百人
ありやゐゐ〜ゐ世道の喪ゐる九ゐ塗ゐゐゐ知ゐ
○宮ゐの地千山猪〜ゐけ〜家屋女ゐ〜ゐゐ〜

武江年表巻之四　畢

編者　斎藤市左衛門幸成

武江年表後編

從延享元甲子年
至嘉永元戊申年　四冊出来

嘉永二年己酉十月刻

發行書林

大坂心齋橋通博労町　河内屋茂兵衛

江戸日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛

同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八

京都三條通井屋町　出雲寺文次郎
大阪心齋橋筋北久太郎町　河内屋喜兵衛
同心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同日本橋通三丁目　山城屋佐兵衛
同横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同本石町十軒店　英屋大助
同神田旅籠町二丁目　紙屋徳八
同大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛
同日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同日本橋通二丁目　須原屋新兵衛
同日本橋通四丁目　須原屋佐助
同神田通新石町　須原屋源助
同淺草茅町二丁目　須原屋伊八

發行

書林